

自治体とNPOが両輪となって移住促進

移住希望者に空き家を紹介

新宿駅から特急で1時間半の距離にある山梨市では、地元のみならず、NPOとともに、空き家への移住促進に取り組む。

空き家の提供者と移住希望者とを結び付けるのは、市で運営する空き家バンク制度だ。過疎対策の観点から、平成18年9月に立ち上げた。空き家を売りたい・貸したい人を市で募って、現地を確認したうえで情報を公開する。一方で、

利用登録を済ませた人を対象に随時、新しい物件情報を郵便やメールで送るほか、毎週金曜日には現地案内を実施する。双方の条件が合えば、契約に至るまでの交渉や契約実務を、提携する山梨県宅地建物取引業協会の会員社が担当する仕組みだ。

平成22年12月現在、売買・賃貸借契約に至った件数は50件。制度を担当する山梨市市民生活課の平

野宗則さんは、「前担当者が確立したシステムの成果」と語る。

契約別では、売買20件・賃貸借30件。「利用登録者の中では賃貸借希望が全体の6割近くまで増えてきました。空き家の価格が500万円〜1000万円程度なら購入を考えますが、それを超えると、『まず実際に暮らしてみたら』と、賃貸に対する意向が強まります」（平野さん）。

移住してもらおう前にまず山梨市に来てもらおう、という趣旨で交流促進事業を展開するのは、地元で組織するまちづくりNPO、山梨ガバメント協会だ。平成18年4月の立ち上げ以来、田舎暮らしの体験ツアーや移住希望者対象の相談事業などを、市とNPOが連携して実施してきた。迅速な対応や豊富なアイデアなど、民間ならではの利点を生かして行政との連携を図る。

自宅は神奈川、田舎が山梨

平成20年7月から、市内の集落内にある借家と神奈川相模原市内の持ち家との間を行き来する松本實さん（70歳）は、移住促進策の柱となる空き家バンクの利用者だ。



炭焼き普及サークルのメンバー、山田駒平さん（右）。松本さんとともに荒れた畑や竹林から材料を集め、炭焼きを行っている



市営の炭焼き窯を利用して炭焼きを行う松本さん。管理する畑の木を伐採して炭焼きしたのをきっかけに、炭焼き普及サークルを立ち上げ活動している



松本さんの山梨のお住まい。このお宅は2軒目で、空き家バンクを利用した1軒目が手狭になったため、もっと広い家をと近所の方の紹介で引越したそう



相模原の家で暮らすのは、正月の時期と自宅で何か用事ができたときくらい。暮らしの基盤はもっぱら、この集落内の借家にある。

もともとアウトドア派。スポーツも好む。長年勤めた外資系企業を56歳で早期退職して以来、自然に恵まれた土地での暮らしを模索していた。

奥様から、「孫

たちの田舎が欲しいから、自宅から1000キロ以内の場所ならOK」と、前向きな一言が発せられたのを機に、構想は一気に進み出す。1000キロ以内という条件を満たす山梨市の空き家バンクに関する記事を田舎暮らしの雑誌で読んだ松木さんは、利用者登録を済ませて、物件探しに乗り出した。

生活スタイルに合う暮らし

普段、松木さんは農作業や炭焼きなどで時を過ごす。近くの畑は、集落内の果物屋から紹介された。広さ約150坪。葛(くず)や笹で荒れていたのを、大型の耕運機を用いて整備し直した。大根や白菜など、多種多様な作物を育てる。農家が処分に困る果樹のせん定した枝などを材料に、試行錯誤を重ねて焼き方を体得してきた。炭焼きは初挑戦以来、20回近くになる。



炭焼窯は、道の駅「花かげの郷まきおか」に隣接した彩甲斐公園の中にある。丘になった公園からは、美しい富士山が一望できる

「朝食を済ませるとすぐ外に出ます。畑にしても炭焼きにしても、

松木さんは「炭焼きは環境にもいいんです。樹木を燃やしたり腐らせると二酸化炭素が発生しますが、炭にして、例えば土に埋めると土壌にも良く、二酸化炭素も発生することはないんです。出来上がった炭をできるだけ多くの人に活用してもらおうにはどうすればいいか、活用法も模索しながら取り組んでいます」と、炭焼きにかける意気込みを話す。

外で動くのが好きな自分の生活スタイルに合っていると思います。おいしい空気を吸いながら体を動かしていると、心身ともに癒されますね」と松木さん。2地域居住を検討する人に向けて、「地域に溶け込んでいくことが大事ですね。あいさつを交わしてまず自分を知ってもらい、近所の人と良好な関係を築くようにしていくといいでしょう。いざという時にも安心です」と助言する。

暮らしを営むということは、周囲の人々とかかわりを持つということ。それだけに2地域居住を考える人は、住む家を探すだけでなく、地域になじめるかどうか感触を探ることも欠かせない。山梨市の空き家バンクとNPOの交流促進事業はまさに、この2つの必要に 대응するもの。これら官民連携の取り組みが、移住促進につながっているようだ。



松木さんが自身で焼いた炭を使ったもの。ただの炭がアート作品に変身



炭焼窯の裏側の山には「岩殿さん」と呼ばれる岩が。岩殿とは昔の地名からきたもので、当時この地域では大きな石に祠を立て、豊作祈念をしていたそう



松木さんたちが炭焼きを始めてから、木の伐採依頼や、材料提供者が次々と現れているそうだ



お誕生日にご家族から贈られたという寄せ書き。山梨での暮らしを応援するお子さんやお孫さんから暖かいメッセージが寄せられている

View of Yamanashi City



1



2



3



4

1. 明治8年に県令藤村紫朗によって建築された牧丘郷土文化館(旧室伏学校校舎) 2. 原生林を流れる溪流がいくつもの滝をなし、国内屈指の渓谷美を誇る西沢渓谷 3. 笛吹川フルーツ公園からは、富士山だけでなく春には眼下に桃の花畑が広がる 4. 新日本三大夜景の一つである笛吹川フルーツ公園の夜景

まちづくりNPOから

民間

「新たな公共」として、地域活性化を目指します

地域活性化を目的に、地元の仲間十数人とともに立ち上げたNPO法人です。「新たな公共」として、行政の役割を一部肩代わりできないか、と考えています。行政ではだれもが納得できる理屈を求めるあまり物事が進みにくくなる面が否めません。民間ならではの良さを生かして、事業を展開していきます。



NPO法人山梨ガバメント
協会理事・事務局長
磯村賢一さん

具体的には、田舎暮らしを体験してもらう事業やWebサイト上で移住希望者の相談に応える事業など、交流や定住を促進する事業に取り組んでいます。ホームページには、行政に先駆けて英語版を作成し、今後は韓国語版も用意する予定です。

これらの事業を通じて、山梨市内に住んでみたくなった方には、空き家バンクの存在を紹介しています。NPO法人で実施する田舎暮らしの体験事業は、空き家バンクの利用登録者にも案内してもらっています。行政とは車の両輪のような関係で、今後とも連携を図っていきたい、と思います。(談)

NPO法人山梨ガバメント協会ホームページ <http://www.yamanashi-ga.org/>

空き家バンク担当から

行政

まず現地を訪ねて、キーマンを見つけてください

成約に至った実績50件が多いか少ないかはともかく、これだけの方が山梨市内に移住されたことは事実です。市内への移住者が増えれば、いろいろな面で地域内の活性化につながります。人と人のつながりが新しく出来るのは、意義深いことです。

平成23年度からは、NPO法人とも連携を図りながら、コンシェルジュの登録制度を始める予定です。空き家バンクの利用者で2年以上定住している方を、山梨市を訪ねてきた方々にその良さを生の声で伝えるコンシェルジュ役として登録します。

思い描いていることが、その地域ですべて出来るとは限りません。移住する先を決めるときには、現地を訪ねたうえで、少し時間を掛けて結論を出してほしいですね。暮らし始めてから相談相手に出来そうなキーマンを見つけておくことも、ポイントです。地域交流のイベントは、そうしたキーマンを見つける場としても活用できるはずです。(談)



山梨市役所市民生活課
まちづくり・協働担当副主査
平野宗則さん

山梨市ホームページ <http://www.city.yamanashi.yamanashi.jp/>

空き家バンクについて <http://www.city.yamanashi.yamanashi.jp/gover/grapple/bank/>